

【MedTec Forum】 1回生のクラス担任として1年間を振り返る

浦山 修 (臨床医学系)

平成 15 年 4 月入学の医療科学専攻 1 年生 36 名のクラスを、浦山と中村が 1 年間担任した。

ここに 2 枚の写真がある。1 枚は 4 月のオリエンテーション時のもの、もう 1 枚は平成 16 年 1 月のスキー合宿(会津高原台鞍山、有志 16 名参加)時のものである。この 9 ヶ月の間に皆は面変わりしたわけではないが、変わったのだろうか、と勝手に空想した。我が家には、皆と同じく大学生になった長男がいて、親が知る彼の朝と休日の行動を皆の昼の行動に重ね合わせることができたので、大学 1 年生の一日(夜がぬけている)としてみた。部活に結構忙しい、友人との携帯のやりとりが多い、勉強は試験前に集中してやる、といったところだろうか。これまでと変わらないものもあるが、変わったものが多そうだ。

ところで、E クラスのフレッシュマンセミナーでは、1 冊の本を輪読してもらった。『失語の国のオペラ指揮者』、神経科医が、自分の診察室を訪れた患者のエピソードを、綴っている。その中に、「言語を獲得する“機会の窓”は青年期には閉じてしまう」ことがのっている。ある学生のレポートに目がとまった。「人間の脳は未熟なままで生まれ、誕生後におかれた環境に大きく影響されながら成長していく。それならば機会の窓が閉じるまでにより多くの経験をするのが、脳の機能をよりよく使えることになると思った」。他のレポートも読

みながら、皆の“機会の窓”はまだ開いていて欲しい、と勝手に願った。大学生活では、自分の将来の道を 1 つ見つけることが課題だろう(桑原知子『大学生の悩みをさぐる』)。それ以外のものを切り捨てるのではなく、いろいろ経験(機会の窓に挑戦)して、他の数多くの可能性を知って、捨てきれずに悩みながら、自分を深めていくことになる。

さて、12 月には、まだ早いかなと思ったが、皆に卒業についてのアンケート調査を行った。興味があったのは「具体的目標があれば教えてください」に対する回答、ある学生は臨床心理士を希望していた。検査技師の資格を有し、心理の仕事をしている人が日本に何人いるのだろうか、日本臨床心理士協会の HP を開いてみた。皆無のようだ。するとこれからの貴女の一挙手一投足が新たな道を切り開くことになる。ヒト・ゲノムが明らかになり、私たちの精神運動の領域に関しても科学的なアプローチが可能な時代になった。「医療科学にいて臨床心理士になれますか」、「ONLY ONE です」。これまでの医療を、ぜひ変えて行って欲しい。

教育は「教えて育てる」ことと言われる。クラス担任は、教育とは「教わり育つ」ことと、勝手に空想している。



新入生オリエンテーション(大洋村)



スキー合宿(会津高原)